

歸命無量壽如来
南無不可思議光

無量壽如来に歸命し、
不可思議光に南無したてまつる。

法蔵菩薩因位時
在世自在王仏所
覩見諸仏浄土因
国土人天之善惡

法蔵菩薩、因位の時、
世自在王仏の所に在して、
諸仏の浄土の因、
国土・人天の善惡を覩見して、

建立無上殊勝願
超発希有大弘誓

無上殊勝の願を建立し、
希有の大弘誓を超発せり。

五劫思惟之摂受

五劫、これを思惟して摂受す。

重誓名声聞十方

重ねて誓うらくは、「名声、十方
に聞えん」と。

普放無量無辺光

普く、無量・無辺光、

限りなき壽命（慈悲）の如来、思いはかることので
きない光明（智慧）の如来であられる阿弥陀如来に
歸依したてまつる。

かつて、阿弥陀如来が仏となる以前、法蔵菩薩と名
乗る求道者であったとき、師と仰ぐ世自在王仏の所に
おいでになって、諸仏が各自の浄土（仏国土）を建立
すべく修めた因行や、浄土に住む人たちや天人の優劣
を観察され、それらに勝る優れた浄土を自ら建立しよ
うと、この上なく勝れた願いをたて、世にもまれな
大誓願を發された。

その大誓願とは、五劫という長きにわたって考え、
思索をこらし選び取られた、四十八の願いであった。
さらに、これらの四十八の願いを要約して、重ねて
願いの主旨を表明し、「南無阿弥陀仏の名号があらゆる
世界に聞かれ、称えられるように」と誓われた。

阿弥陀如来の放ちたもう光明は、三世にわたって量
りしれない光明（無量光）、空間的に至り届かないとこ

<p>無礙無対光炎王 清浄歓喜智慧光 不断難思無称光 超日月光照塵刹 一切群生蒙光照</p>	<p>無碍・無対・光炎王・ 清浄・歓喜・智慧光・ 不断・難思・無称光・ 超日月光を放ちて、塵刹を照らす。 一切の群生、光照を蒙る。</p>	<p>本願名号正定業</p>	<p>本願の名号は正定の業なり。</p>
<p>至心信楽願為因</p>	<p>至心信楽の願を因と為す。</p>	<p>至心信楽願為因</p>	<p>至心信楽の願を因と為す。</p>
<p>成等覚証大涅槃 必至滅度願成就</p>	<p>等覚を成り、大涅槃を証するこ とは、 必至滅度の願、成就なり。</p>	<p>われらが信心を得れば、正定聚（次の生に必ず仏と なると約束された身）と決定し、命終わつて浄土に生 まれるや、仏のさとりを開くのは、第十一願に「必ず 滅度に至らしめよう」と誓われ、その願いが成就され ているからこそである。</p>	<p>ろのない光明（無辺光）、なにものにも妨げられない光 明（無碍光）、比べるもののない光明（無対光）、威力 すぐれ炎王たる光明（光炎王）、貪りを滅す清らかな光 明（清浄光）、瞋りを滅す喜びの光明（歓喜光）、無知 を滅す智慧の光明（智慧光）、常に照らして絶えること がない光明（不断光）、人間の思いも及ばない光明 （難思光）、言葉であらわし尽くせない光明（無称光）、 太陽や月の輝きも超えている光明（超日月光）であつ て、あらゆる世界を照らし、すべて生けるもの、この 光照を蒙らないものはない。</p>

如来所以興出世
唯說弥陀本願海

五濁惡時群生海
応信如来如実言

能発一念喜愛心
不断煩惱得涅槃
凡聖逆謗齊回入
如衆水入海一味

撰取心光常照護

已能雖破無明闇

貪愛瞋憎之雲霧
常覆真信心天

如来、世に興出したもう所以は、唯、弥陀の本願海を説かんとなり。五濁惡時の群生海、まさに如来如実の言を信ずべし。

よく、一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断せずして涅槃を得るなり。凡聖・逆謗、齊しく廻入すれば、衆水、海に入りて一味なるがごとし。

撰取の心光、常に照護したもう。

すでによく無明の闇を破すといえども、貪愛瞋憎の雲霧、常に真信心の天に覆えり。

釈迦如来を含め諸仏がこの世にあらわれなされた目的は、ただ阿弥陀如来の海とも譬えられる本願を説くためであつた。五つ（時代・思想・煩惱・人間の質・生命）の濁りに満ちた悪世に生きる者たちよ、まさに如来の真実の言葉を信ぜよ。

およそ、誰でも本願のいわれを聞いて信心喜ぶ人となれば、罪の深い凡夫のままでも、煩惱を断つことなく涅槃のさとりを開く身と定まる。

凡夫も聖者も、五逆の罪を犯した悪人も正法を謗るような者も、すべてみな心をめぐらして本願の海に帰入すれば、あたかも万川が海に流れ入ると同一の塩味の海水となるようなものである。

阿弥陀如来は救いとる光明を放って、つねに信心の人を照らし護りたもうておられる。

信心を得たとき、すでにこれまで仏智を疑ってきた無知の闇は断たれるが、悲しいかな、貪りと瞋りの雲霧によつて真信心の天空は覆い隠されている。

譬如日光覆雲霧

雲霧之下明無闇

獲信見敬大慶喜

即橫超截五惡趣

一切善惡凡夫人
聞信如來弘誓願
仏言廣大勝解者
是人名分陀利華

弥陀仏本願念仏
邪見驕慢惡衆生
信樂受持甚以難

難中之難無過斯

譬えば日光の雲霧に覆われるれども、雲霧の下、明らかにして闇無きがごとし。

信を獲て、見て敬い、大いに慶喜すれば、即ち横に五惡趣を超截す。

一切善惡の凡夫人、如來の弘誓願を聞信すれば、仏、「廣大勝解の者」と言えり。この人を「分陀利華」と名づく。

弥陀仏の本願念仏は、邪見驕慢の惡衆生、信樂受持すること甚だもって難し。難の中の難、これに過ぎたるはなし。

しかし、あたかも太陽が雲や霧に覆い隠されていても、その雲や霧の下は明るく、もはや闇が無いように、一たび信心を得た人は、みずからの煩惱に覆われているけれども、仏智に対する疑いの心はすっかり晴らされていのである。

かくして、信心を獲て、み教えを聞いて大悲を敬い、大いに喜ぶ人となるならば、そのとき直ちに、阿弥陀如來の本願力により、五つの迷いの世界（地獄・餓鬼・畜生・人間・天上）を横さまに超えて、浄土に生まれる身と定まる。

そこで、善人・悪人の別なく、すべての凡夫が阿弥陀如來の本願のいわれを聞いて信ずれば、釈迦如來はかれらを称えて、「すぐれた智慧者」と呼び、「人々の中の白蓮華」といわれた。

それにしても、阿弥陀如來の本願に誓われた念仏は、邪な見解を抱き、驕り高ぶる心あさましき人々には、素直に信じ喜び保つことは極めて難しく、至難中の難事につきる。

印度西天之論家
中夏日域之高僧
顯大聖興世正意

明如来本誓応機

釈迦如来楞伽山
為衆告命南天竺

龍樹大士出於世
悉能摧破有無見
宣説大乘無上法
証歡喜地生安樂

顯示難行陸路苦

印度西天の論家、
中夏・日域の高僧、
大聖興世の正意を顯し、

如来の本誓、機に應ぜることを
明かす。

釈迦如来、楞伽山にして、
衆のために告命したまわく、
「南天竺に、
龍樹大士、世に出でて、
悉くよく有無の見を摧破せん。
大乘無上の法を宣説し、
歡喜地を証して安樂に生ぜん」と。

「難行の陸路、苦しきことを顯示して、

西国インドの龍樹菩薩と天親菩薩、中国の曇鸞大師と道綽禪師と善導大師、そしてわが国の源信和尚と源空聖人、これら三国の七高僧は、異口同音に「大聖（釈迦如来）がこの世に出現なされた真意は、阿弥陀如来の本願を説くことであつた」と明らかにし、そして「阿弥陀如来の本願こそが、われら凡夫の能力にかなつてゐる」ということを説かれた。

釈迦如来は、入滅後六百年のことを確約して、楞伽山で人々にこのように説法なされた。

「南インドに龍樹という菩薩（徳の高い人）が出られて、有と無の二つの偏つた見解を打ち破り、大乘仏教の至極の教えを説きひろめて、彼自身、仏のさとりを開くと決定した不退転の位を得て、命終わつて阿弥陀如来の浄土に往生するであろう」と。

龍樹菩薩はその著『十住毘婆沙論』の「易行品」の中で次のように述べてゐる。

「大乘仏教の求道者の歩む菩薩道は、難行そのものであつて、あたかも陸路を歩む人のように労苦に満ちてゐる。そこで、その大乘菩薩道を達成するためには

信樂易行水道樂

易行いぎようの水道すいどう、樂たのしきことを信樂しんぎようせしむ。

憶念弥陀仏本願
自然即時入必定

弥陀みだぶつのほん願がんを憶念おくねんすれば、自然じねんに即すくの時とき、必定ひつじょうに入る。

唯能常称如来号
応報大悲弘誓恩

ただよく常つねに如来にょらいの号みなを称しょうして、まさまに大悲だいひ弘誓くげいの恩おんを報ほうずべし」といえり。

天親菩薩造論說
歸命無礙光如来

天親てんじん菩薩ぼさつ、論ろんを造つくりて説とかく、「無碍むげ光如来にょらいに歸命きみやうしたてまつる。

依修多羅顯真実
光闡横超大誓願

修多羅しゆたらに依よりて、真実しんじつを顯あらわして、横超おうちようのだい誓願げいを光闡こうぜんす」

広由本願力回向
為度群生彰一心

広ひろく本願力ほんがんりきの廻向えこうによりて、群生ぐんじやうを度とせんがために、一心いっしんを彰あらわす。

歸入功德大宝海

「功德くどくのだい宝海ほうかいに歸入きにゆうすれば、

易行道いぎようどう、すなわち「信心しんじんを手立ててとする易行いぎよう」(信方便しんほうべんの易行)によるべきであり、これはあたかも船に乗のつて水路すいろを行く人ひとのようように安樂あんらくそのものである。

この易行道いぎようどうの教しよえは、阿弥陀如来あみだにょらいの本願ほんがんを信しんずる者ものは、信心しんじんを得えたその時直ただちに、本願力ほんがんりきの働はたらきによつて仏ぶつのさとりを開ひらくに決定けつじやうした不退転ふたいてんの位くらゐに入るから、ただ常つねに「南無阿弥陀仏なまあみだぶつ」と名号なごうを称なえて、如来にょらい大悲だいひの広こう大なおん恩おんに報謝ほうしゃすべきである」と。

天親菩薩てんじんぼさつは、その著しよ『浄土論じやうどろん』冒頭ぼうとうの「願生偈がんじやうげ」に、「世尊せそん (釈迦如来しやくかにょらい) よ、わたくしは一心いっしんに、尽十方無碍じんじふぼくむげ光如来こうにょらい (阿弥陀如来あみだにょらい) に歸命きみやうしたてまつる。わたくしは『無量寿経むりやうじゆきやう』によつて真実まじつの仏意ぶつゐ、真実まじつの功德くどくである名号なごうのいわれを開示かいじしよう。我々われらをして、横よこ様に五つの迷まいの世界せかいを超こえ、仏ぶつのさとりを得えさせる、如来にょらいのだいなる誓願げいをひろく説とき明あかそう」と。

つまり天親菩薩てんじんぼさつは、阿弥陀如来あみだにょらいが我々われらに廻めぐらしたもう本願力ほんがんりきによつてひろく一切衆生いっさいしゆじやうを救すくうべく、その本願ほんがんのいわれを信受しんじゆする信心しんじんである「一心いっしん」のいわれを詳くわしくお示しめし下くだされたのである。

また『浄土論じやうどろん』に、こう説とかれてゐる。

「南無阿弥陀仏なまあみだぶつの名号なごうは、一切衆生いっさいしゆじやうを救すくいとして捨すて

必獲入大会衆數

得至蓮華藏世界
即証真如法性身

遊煩惱林現神通
入生死園示応化

本師曇鸞梁天子
常向鸞処菩薩礼

三蔵流支授浄教

焚燒仙經帰楽邦

天親菩薩論註解
報土因果顕誓願

必ず大会衆の數に入ることを獲。

蓮華藏世界に至ることを得れば、
すなわち真如法性の身を証せし
む」と。

「煩惱の林に遊んで神通を現じ、
生死の園に入りて応化を示す」
といえり。

本師曇鸞は、梁の天子、
常に鸞の処に向いて、菩薩と礼
したてまつる。

三蔵流支、浄教を授けしかば、
仙經を焚燒して、楽邦に歸した
まいき。

天親菩薩の論、註解して、
報土の因果、誓願に顕す。

ないというあらゆる功德に満ちた大宝海である。かかる名号のいわれを信ずる身となつたとき、必ず、この世において浄土の聖衆（菩薩）たちの仲間に入るであろう。そして、命終わつて、大蓮華に蔵められた世界とも呼ばれる浄土に往生すれば、たちどころにさとりを開いて仏となる」と。

また「浄土に往生して仏となれば、人々を救うべくこの世に還り、煩惱の林に遊化して自由自在の力を現し、数えきれない生死の世界で人々に応じて教化の働きをなす」と。

梁の武帝は、常に曇鸞大師の居られるところに向かつて、曇鸞菩薩と礼拝され敬われた。

もともと、大師は長生不死の法を求めて江南の地へ行き、陶隱居より仙術の書を授けられたのだが、その帰途、インドからきた三蔵法師の菩提流支に出会い、『觀無量壽經』を授けられたと、大師は苦勞して手に入れた仙術の書を焼き捨てて、浄土に往生する教えである浄土教に帰依された。

曇鸞大師は、天親菩薩の『浄土論』を注釈して『浄土論註』を著わし、阿弥陀如来の浄土が建立された因も果も、あらゆる衆生がその浄土に往生する因も果

往還回向由他力

「往還の廻向は他力に由る。

正定之因唯信心

正定の因は唯、信心なり。

惑染凡夫信心發
証知生死即涅槃

惑染の凡夫、信心發すれば、
生死即涅槃なりと証知せしむ。

必至無量光明土
諸有衆生皆普化

必至無量光明土に至れば、
諸有の衆生、皆、普く化す」と
いへり。

道綽決聖道難証

道綽、聖道の証し難きことを決
して、

唯明浄土可通入

唯、浄土の通入すべきことを明

万善自力貶勤修
円満徳号勸専称

万善の自力、勤修を貶す。
円満の徳号、専称を勧む。

も、みな阿弥陀如来の本願にあらわれていることを明
らかにした。

そして、こう言う。

「我々が浄土に往生すること（往相）も、浄土からこ
の世に還つて人々を救う働き（還相）も、すべて他力
（如来の本願力）により廻らし施されたものである。我々
が浄土に生まれて仏のさとりを開く正しき因は、ただ
この他力を信知する信心である。

たとえ煩惱にけがれた凡夫であつても、一たび信心
ただけで、迷い（生死）すなわち悟り（涅槃）な
り」というすぐれた仏果を得る身と定められる。命終
わつて、必ず、量りなき光明に満ちた浄土に生まれ仏
となれば、再びこの世に還つてきて、あらゆる人々を
教化して救うのである」と。

道綽禪師は『安樂集』を著わして、「末法の時代の人々
にとつて、善を積み徳を重ねて仏と成る大乘の教え
（聖道門）は、さとりに難いものである」とはっきりと証
明し、「ただ念仏の教え（浄土門）によつてのみ、仏と
なることができる」ということを説き明かした。

そして禪師は、よろずの善根功徳を修行する自力
聖道門を斥けて、さとりを開くための功徳が円かに満
ち備わっている南無阿弥陀仏の名号を専ら称えよと、

三不三信誨慙

三不三信の誨、慙にして、

像末法滅同悲引

像末・法滅、同じく悲引す。

一生造悪値弘誓

「一生、悪を造れども、弘誓に値

至安養界証妙果

いぬれば、安養界に至りて、妙果を証せしむ」といえり。

善導独明仏正意

善導、独り仏の正意を明かせり。

矜哀定散与逆悪

定散と逆悪とを矜哀して、

他力浄土門を勧められた。

また、曇鸞大師の述べられた正しい信心の三つのすがた（三信〓素直で、疑い無く、余念無きこと）と、相応しくない信心の三つのすがた（三不信〓素直でなく、二心あり、余念あること）を、禅師は重ねて引用して、信心についてねんごろに教示された。

そして、像法・末法・法滅と時代が進んで、仏法の教えさえもなくなっていくころと、浄土の教えだけはさとりに至る道であると、あらゆる時代の人々に信心を勧め、等しく大悲をもって導かれた。

さらに禅師は「一生涯、悪を作り続ける者でも、一たび阿弥陀如来の本願にお会いして信ずる身となれば、命終わって浄土に生まれ、仏のさとりを開かせていたのだのである」と仰せになった。

善導大師は、古今の諸師の『観無量寿経』に関する解釈の誤りを正し、ただ独り釈迦如来の真意を明らかにされた。

すなわち、大師は『観無量寿経』を注釈した『観経疏』を著わして、阿弥陀如来は、心を静め禅定に入って修行にはげむ人（定善）や世間的な善を修める人（散善）、あるいは五逆罪や十悪を犯す悪人、それら

光明名号顕因縁

光明・名号、因縁を顕す。

開入本願大智海
行者正受金剛心
慶喜一念相應後
与韋提等獲三忍

「本願の大智海に開入すれば、行者、正しく金剛心を受けしめ、慶喜の一念相應して後、韋提と等しく三忍を獲、

即証法性之常樂

すなわち法性の常樂を証せしむ」といえり。

源信広開一代教
偏帰安養勸一切

源信、広く一代の教を開きて、ひとえに安養に帰して、一切を勧む。

専雑執心判淺深

専雑の執心、淺深を判じて、

報化二土正弁立

報化二土、正しく弁立せり。

の人々を等しく哀れみ慈しまれて、放ちたもう光明の縁（間接原因）と、南無阿彌陀仏の名号の因（直接原因）とをもって、浄土に往生せしめたまうことを明らかに示された。

さらに大師は説かれた。

「名号のいわれを信じて、本願の智慧の大海に帰入すれば、念仏の行者は阿彌陀如来よりダイヤモンドのごとき堅固な信心をいただき、喜びの心が本願になつて生ずるその時、『観無量寿経』の説法を聞いて救われた韋提希夫人と同じく、三種のはつきり認識して決定すること（三忍）を得て正定聚不退転の位に住し、命終わって浄土に生まれるや、間違ひなく一切の苦を離れ清らかなさとりを得る」と。

源信和尚（恵心僧都）は広く釈迦如来が一代に説かれた教えに精通し、『往生要集』を著わして、ただただ阿彌陀如来の浄土往生の教えに帰依すべきであるとして、すべての人々に勧められた。

そして、和尚はその書の中で、本願を信じ専ら称名念仏を修める専修の人と、念仏以外の行も雑えて修める雑修の人との、信心の真偽（淺深）を判定して、阿彌陀如来の浄土のうちに報土と化土の二土をたて、

極重悪人唯称仏

「極重の悪人は唯、仏を称すべし。

我亦在彼摄取中

我またかの摂取の中に在れども、

煩惱障眼雖不見

煩惱、眼を障えて見ずといえども、

大悲無倦常照我

大悲、倦きこと無く、常に我を照らしたもう」といえり。

本師源空明仏教
憐愍善悪凡夫人

本師源空は仏教に明らかにして、善悪の凡夫人を憐愍せしむ。

真宗教証興片州
選択本願弘悪世

真宗の教証、片州に興す。選択本願、悪世に弘む。

専修の人は報土に生まれ、雑修の人は報土の中の辺地にある化土に生まれるということを、正しく区別してください。

和尚は述懐して、『往生要集』の中で次のように言われる。

「我々のごとき極重の悪人は、ただ念仏を称えて浄土に生まれようと願うべきである」。

また、

「私（源信）もまたかの阿弥陀如来の光明（救い）の中にすでにおさめとられておりながらも、わが身に沸き起る煩惱に眼が覆われて、阿弥陀如来の尊いお姿を見ることができないでいる。しかしながら、大いなる慈悲の阿弥陀如来は、倦み疲れることなく、常に私を照らし抱いてくださっている」と。

わが師、源空（法然）聖人は、智慧第一の法然房と称せられるごとく、仏教を極め尽くされ、善・悪の凡夫をあわれんで、『選択本願念仏集』（『選択集』）を著わし念仏の教えをもって皆を導かれた。

本願の教えとその救いを説く浄土の教えを我が国に興隆し、阿弥陀如来の選び取られた本願の念仏を、五つの濁りに満ちた悪世に弘められた。

還来生死輪転家

決以疑情為所止

速入寂靜無為樂

必以信心為能入

弘經大士宗師等
拯濟無辺極濁惡

道俗時衆共同心
唯可信斯高僧說

「生死輪転の家に還来することは、決するに疑情をもって所止とす。速やかに寂靜無為の樂に入ることは、必ず信心をもって能入と為す」といへり。

弘經の大士、宗師等、無辺の極濁惡を拯濟したもう。

道俗時衆、共に同心に、唯、この高僧の説を信ずべしと。

源空聖人は『選択集』三心章の中で次のように説かれ、往生の正因はただ信心にあることを示された。

「我々が生まれては死に、死んでは生まれて、車輪の廻るように永く迷いの世界を離れられないのは、阿弥陀如来の本願を疑う心のためであり、それゆえに迷いの世界を住処としてきたのである。

この度、その迷いの輪廻を断ち、速やかに浄土に生まれて仏のさとりを開くのは、必ず信心が正因となるからである」と。

『無量寿経』の真意を弘めた、これら二人の菩薩と五人の宗師たちは皆等しく、限りなく濁惡きわまりない迷いの人々を救いたもうた。

出家者も在家の者も、世のすべての人々よ、共に心（信心）を同じくして、ひとえに、これら七人の高僧たちの説くところを信ぜよ。